

〈実践論文〉

非認知能力に視点をおき戸外遊びに焦点をあてた保育の一考察 ～保育の環境による教育を基本とする幼児教育において 戸外遊びに焦点をあてる～

A study of childcare focusing on non-cognitive abilities and outdoor play

～ Focusing on outdoor play in early childhood education based on environment-based education ～

関西福祉大学 丸山真理子^{*1}

要約：本研究では、環境による教育を基本とする幼児教育中で、幼児にふさわしい環境を考えた時、その一環として、戸外遊びに焦点をあて、保育の中で取りだして考えてみることにした。近年の幼児を取り巻く環境は、十数年前とは大きく変化しており“体を動かして遊ぶ”という経験が著しく少なくなっている。そこで、幼児期に戸外で体を動かして遊ぶ体験の重要性と、子ども達が戸外遊びを楽しく経験し、主体的活動の中で無自覚な学びがある活動として積み上げていく筋道を考えた。さらに、幼児期は、心身が密接にかかわりながら具体的な経験を通して様々な力をつける。よって、戸外でのびのびと遊びを展開していく中、運動能力の育ちへ繋がる面と共に、幼児が主体的に遊び、友達仲間との自治的な活動に導くことを重要視することで、無自覚な学びの中で意欲・協同性・コミュニケーション能力・自己肯定感などの非認知能力を育む視点を重視し考察した。

Key words：環境 戸外遊び 無自覚な学び 非認知能力

1 はじめに

幼児期の発達の特徴を踏まえ、幼児は就学以降のように座学ではなく、具体的な経験の中で自ら心と体を動かして遊ぶ中でこそ様々な学びがある。幼稚園教育において育みたい資質・能力は幼児の生活する姿から捉えたものをねらいとし、幼児の発達の側面からまとめて5領域に編成され「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」としている。しかし、これらは幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連し合いながら達成に向かうとともに、自発的活動としての遊びの充実が幼児期の発達にふさわしい学びとなる。何かをさせるのではなく基本的に子ども

達を自由な中において保育が展開される。しかし、自由といっても放っておいて子ども達だけで豊かな遊びが展開されるわけではない。川邊（2020）によれば「遊びを中心とした保育とは単に自由か一斉か、といったような保育方法や保育形態で分けた場合の自由な保育のことを目指すのではない。子どもの発達に即した保育を目指す理念である」ととらえたい。子どもにとってどんな経験が必要かということを第一に考える保育のことである。」と記されている。

目の前の子ども達の状況をよく見て、よく感じて、本当に必要な真の成長に向かえるようにしたい。子ども達の遊びが、豊かなものになるように環境構成や教師の意図・援助などにより、子ども達を成長へ導けるようにするとは、保育

^{*1} Mariko MARUYAMA
Kansai Fukushi University

者が学びの要素が散りばめられた遊びへの足場をかけていくということだと考える。子ども達の豊かな遊びの特徴は子ども自身が楽しんで遊んでいるかどうかであり、楽しくなければ子どもの心には何事も学びとはならない。就学以降の学びでは自覚的な学びとなる。しかし幼児期は発達段階として、何かを教えようとする幼児にとってそれは仕事活動のようになるので無自覚な学び（自身では学んでいるとは思っていない楽しい学び）であることがふさわしく主に自由遊びの中で学んでいる。あえて保育の焦点として、様々な環境の中から戸外遊びとしたかについては自由遊びがフリースペースであるならば、より保育者の意図をこめたガイドプレイとして戸外遊びを位置付けるためである。幼児を取り巻く環境は“体を動かして遊ぶ”という経験が著しく少なくなっていることや以下に述べる戸外遊びの必要性を強く感じたため、保育の中で焦点をあてて取り入れることとした。楽しい遊びの中では、自然と体の動きが出てきて、遊びについて考え、友達と伝え合い、共有や役割分担が生まれ、やがて友達同士が仲間として主体的に活動しようとする中で子ども達が必要な力を育む場となると考える。教育基本法第11条・第1章 総則 第1 幼稚園教育の基本では3つの重要な事項を示した後に、物理的・空間的な環境構成、教師の役割について示している。「教師は、幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。この場合において、教師は、幼児と人やものとのかわかりが重要であることを踏まえ、教材を工夫し、物的・空間的環境を構成しなければならない。」幼稚園教育要領 前文・第1章 総則としている。教材を工夫しとの文言が入れたのはこの度の改訂において、はじめて記載された文言である。教材を工夫するという文言が入れたことの意図するところについて、幼児

期は環境による教育、それは揺るがない基礎・基本である。さらに、保育者が幼児の学びをより明確に意図した環境構成とその援助の必要性、または幼児が楽しいと主体的に遊べるような働きかけを積極的に行う方向性をもつ、などの意味が含まれていると受け止めた。

2012年に文部科学省より「幼児期運動指針」～毎日、楽しく体を動かすために～のガイドブック（2012）が出され、幼児期に体を動かして遊ぶことが提唱され、心身共に成長することが目指された。このガイドブックでは「現代の社会は、科学技術の飛躍的な発展などにより、生活が豊かで便利になっています。しかし、生活全体が便利になったことは、必ずしも高い体力や多くの運動量を必要としなくなっており、子どもにとっては、体を動かす機会を減少させただけでなく、家事の手伝いなどの機会も減少させています～また、子どもが遊ぶ場所、遊ぶ仲間、遊ぶ時間の減少、そして交通事故や犯罪への懸念などが体を動かして遊ぶ機会の減少を招いています～幼児にとって体を動かす機会が減少することはその後の児童期、青年期への運動やスポーツに親しむ資質や能力の育成の阻害にとどまらず、意欲や気力の減弱、対人関係などコミュニケーションをうまく構築出来ないなど、子どもの心の発達にも重大な影響を及ぼすことも懸念されます。このような状況を踏まえると、主体的に体を動かす遊びを中心とした身体活動を、幼児の生活全体の中に確保していくことは大きな課題と言えます」と記された。文部科学省が「幼児期運動指針」を提案する実態にまで至る以前は、安全な空き地や野原で自然に近所の大勢の子ども達が集まり、年長者がリーダーとなって、年少者もうまく含めての素朴な遊びが展開されていた。現代社会になり、少子化が進む中、集まる子ども達の人数が減少しただけではなく安全に遊べる場、遊びを展開するに必要な年長者と年少者のかかわりなど、

遊ぶ場所や人間関係も確保されなくなってきた。

中村（2011）は、文部科学省が2008年から約191万人の小・中学校児童を対象に全国体力・運動能力、運動習慣等調査を実施し、握力・反復横跳び・50メートル走・ソフトボール投げなどの調査結果により子ども達の体力低下は疑うところがなく、生きていくために最低限必要な動きへすら懸念を示している。それと同時にそのような調査をしながら体力向上へ取り組んでも根本的な問題は一つも変わっていない、学力ばかりに気をとられる親たちに警鐘を鳴らしている。また、春日（2022）は「近年、子ども達の体力・運動能力の二極化が問題視されている。幼児期の段階から、運動する子と運動しない子に分かれている状況が二極化を招く一因となっている。体力・運動能力が低い子どもは、高い子に比べて身体活動量を十分に確保できていないことが主因であるため、身体活動の楽しさを知り、習慣化することが鍵となっている。心理学、社会学、健康科学、脳科学など諸科学の発達により、運動遊びの重要性が学術界においても再認識されるようになってきた。つまり、子ども同士が群れながら遊び中には身体だけでなく、心や社会性の発達にも寄与するのである」と指摘する。

このような実態から「ゲームが好きだから…」「外遊びは嫌いだから…」「製作の方がいい…」など戸外遊びの経験が少ない、または偏った遊びの好みとなっている等に注視し、園の保育の中で戸外遊びに焦点をあて取り出して育てていかねばならない面をより強く意識することが望ましい状況となった。かつて幼児期は「目には見えない心の教育が大切、最後に人の人生を支えるのは想像する力である」と内面の教育を重視してきた。さらに、現在の子ども達の実態を踏まえて「心と体を動かして心身共に育つ保育内容や援助」が大切である。

先述の幼児期運動指針について、田中（2021）らは「幼児期における運動の意義を説明しているそれらの理解については、若干の注意が必要だと考える。～幼児期における運動の意義はとりわけ運動全般に対しての「効果的特性」の側面が強く打ち出されている。～そのような運動による効果は、幼児にとってその運動を遊びとして主体的に遊んだことにより2次的にもたらされる、運動遊びの外的価値（extrinsic value）であるとの理解が必要である。」としている。そして、「自発的な運動遊びが活発になるような指導」に焦点を当てて実践されている。上記の「2次的にもたらされる、運動遊びの外的価値（extrinsic value）である」という見解や「自発的な運動遊びが活発になるような指導」に焦点を当てて実践された着眼点は重要である。

今回の研究では、自発的な運動遊びが活発になるように指導するということからさらに保育現場で保育内容として主体的に体を動かして遊ぶ戸外での運動遊びの機会を確保することが必要なこととした。子どもたちに運動をさせるのではなく幼児教育の基本的な考え方である環境を主体的に取り込むという状況を作りつつ、教材としての戸外での運動遊びにより焦点を当てて取り入れるとともに“友達仲間との自治的な活動に導くこと”の観点が重要であるとした。さらには、そこに非認知能力に視点をおいた学びの読み取りを意識することで子どもたちの内面的な育成を伴った戸外遊びの検証が出来る。非認知能力の育成について佐々木（2018）は「非認知能力とは学力や技能とは異なる能力で、具体的には目標の達成（忍耐力、自己抑制、目標への情熱）、他者との協働（社交性、敬意、思いやり）、情動の制御（自尊心、楽観性、自信）などが挙げられる」とし「近年科学的にも証明されつつある。OECD（経済協力開発機構）が加盟11か国を対象としに実施した調査では、非認知能力を育むと、肥満、鬱、問題行動、い

じめなどの抑制に効果がある」「これらが社会全体に広がることで、税収増加や医療費削減といった社会的・経済的効果につながるという調査結果がある」としている。非認知能力についてより一層保育の中でも注視してく事が大事である。

2 研究の視点

幼児は、楽しく主体的な活動の中でこそ学ぶことが出来る。それが幼児本来の特性であり、無自覚な学びであることに視点をおき、さらに心も体も育つ戸外遊びによるアプローチをその方法とし、以下の4点を主な視点とした。

- (1)「戸外遊びにおけるより良い環境構成」
- (2)「保育内容や援助についての保育者間共有」
- (3) 戸外遊びに焦点化した「計画的な保育の位置づけ」
- (4) 非認知能力に視点を置いた「学びの確かめ」
以下一つ一つについて述べることとする。
- (1)「戸外遊びにおけるより良い環境構成」について

文部科学省は幼児期運動指針ガイドブックにおいて以下の通り指摘する。

「子どもの遊びについては、生物学説、生活準備、休養説、基本的欲求説等、いくつか多くの説があるが、1つの説に固執することは避けて、いくつかの動機によって発動された活動に園児が夢中になって取り組む場合を遊びと考えたい。すなわち、遊びは人間の本質的な活動であるという立場を大切にし、遊びを発生の動機や形態から見るのではなく、園児の自主的、主体的、内発的、創造的な活動として捉える。」

体を楽しく動かして、心身共に成長することを目指すには当然ながら保育内容や活動が幼児の自発的活動としての遊びでなければならない。体の成長を…と一斉に運動を促しても幼児にとっては楽しい遊びではなく、単

なる行動となり、仕事活動となる。それでは心身共に成長を目指すということにはならない。本研究の中で体を楽しく動かして、心身共に成長することを目指した遊びをのびのび遊びと称する。

原田（2001）らは「園児が未分化であるために遊び中心の活動を推奨するものではない。遊び、課業、労働という区分をすることが多いが、遊びと学習は対立する物ではない。共通の目的を持った園児が、自主的に、意欲的に、主体的に、取り組むときは、形がどうあっても遊びと言えよう。換言すると、園児が熱中して取り組んでいる場合はすべて遊びと言っても良からうが、この子の能力よりもかけ離れた活動は、一般的には遊びであっても、この子にとっては遊びとはいえない。この子が興味を持って選択し、夢中になって取り組むものでなければ課業や労働である。」と言っている。

体を使って遊ばせようとして、子ども達に〇〇遊びを勧めたとしよう。子ども達は大好きな先生から誘われ、大好きな先生が見守るもとでは誘いに乗って遊ぶだろう。しかし、そこには自ら遊びに取り組もうという幼児の気持ちが伴うことが重要である。

- (2)「保育内容や援助についての保育者間共有」について

のびのび遊びでは全園児を全保育者によって見ながら保育するということがベースであるので、実践へ向けては基本的な考え方・実践方法などを園の全保育者によって共有することが重要である。具体的に以下の4点について保育者間での共有し実践をした。

- ①環境設定の留意点（4つの間を確保する）

時間・空間・仲間・間

子どもが自分の好きなことを見つけたり、友だちと一緒に考えたりできる時間。のびのびと走り回って遊べるような空間。気が合う

遊び仲間。(友だち)そして間。間とは、子どもが自ら思いついたり、考えたり、活動をはじめたりしようと思えるような雰囲気を作ること。主体的、内面的な育ちへ向かうための「待ちの保育(姿勢)」ということである。

待ちの保育は、環境による教育を基本とする幼児教育の中での具体的な保育者の援助の方向性と類似していると考え。ふさわしい環境設定を行い、子どもをよく見る、子どもが興味をもちはじめたとき、気持ちが動きはじめたと見たときに必要な援助を行うか、さらなる見守りがふさわしいかというような援助の方向性は保育のあらゆる場面において有効であると考え。

②保育者の大切にすべき援助の方向性

子どもをよく見て、心身の状況を見極める
好きな遊びを見つけて楽しんでいるかどうかを見極める。

- ・表情をよく見て、危険な状況はないか、一人でいるのは遊ぶ友だちがいないのか、それとも一人遊びをしても楽しめているのか、自分で遊びを探そうとしているのかなど
- ・自分の思いも出しながら、友だちとかかわって遊んでいるか、友だちの気持ちや考えに合わせ過ぎていないか
- ・遊びはじめ、仲間になりはじめなど、充実した遊びへ向けタイムリーにかかわれる場面があるか
- ・友だちとかかわって遊んでいるか
- ・聞き上手・話合わせ上手

はじめての集団生活になる子ども達には危険に至らないように遊び方や園のルールなどについて話し合うこともある。また5歳児でも、時期により子どもたちだけでは話し合い解決ができず見極めた時には保育者が援助する。しかし、話し合いでは保

育者が教えたり、一方的に解決策を提示したりしないように留意。それには、その場だけではなく、普段から何でも言える・聞いてもらえるという雰囲気、何事も自分が選んで決めることができるといった経験の積み重ねが重要で。

・待ちの保育の基本姿勢

待ちの保育の姿勢とは、保育者が指図・命令・禁止をする・許可を出すなどの場面を作り出さないようにすることである。しかし、なかでも“禁止”については◇命にかかわる◇差別する◇他の子どもに大きな迷惑をかける等のような場面には、その場の子どもに心に届くように、じっくりとしたかわりや話し合いが必要である。

・遊びへの誘いと退き上手

遊びを見守る中、目の前の子どもがのびのび遊びのねらいにおいて、どのような状況にあるのかを見極めつつかわることが大事である。例えば、ままごとをしている仲間がいると、遊びははじめたばかりなのか、ままごと遊びに偏りがちでその遊びから切り替えてさらなる充実した遊びへ向かえる援助をした方が良いのか。他の遊びへ誘ったとしても長い時間、持続して保育者が遊びに参加していると、子ども同士のかかわりとなりにくいので遊びが子どもの中で定着したと見極めたとき保育者は素早く引き下がり、子ども達で遊び続けられるように見守る。また必要に応じてかわる。

③自発的遊び・主体性の育ちに向かうために

「のびのび遊び」が展開できるように環境設定を行い、タイムリーに援助としての誘い掛けを行うが、その前段階の“子ども発の遊び”も大事にしたい。まずは自分のしたい遊びをたっぷり出来るゆとりを持つこと、さらに体を動かしたり仲間と遊んだりする前に、子どもから始まる“子ども発”の遊びを見逃

さずにそこへ寄り添ったり、共感したりすることが遊び心へと繋がる。例えば、園庭でスコップを見つけた子どもが、スコップ本来の使用目的ではないがスコップの持ち手の部分を指で弾いて、スコップ飛ばしをはじめた。次に、ジャングルジムも本来は登る遊びであるが、一人の子が上の方へボールを投げ入れてボールが、上下左右にパチンコ玉のように落ちることを楽しんでた。さらには、リレーのバトンである円形バトンを築山の上から転がして、カーブして転がっていく様子を楽しむような姿があった。そのような場面に、保育者が着目し「うわー、面白そう!」とその場に参加すると、周りの子ども達も集まってきた一緒に遊べた。このような遊びは長続きこそしないが、その時の“面白いこととして遊べるな”ということを友だちと共有出来た”という感覚は子どもの中に小さな積み重ねとなっていく。

④仲間意識に視点を置いて

「のびのび遊び」の展開を目指す体が使って遊ぼうということと同時に「みんなで遊ぶと楽しいのだ」という感覚を促す遊びを取り入れる。

例えば「ガラガラ、ドカーン」の遊び。円陣で座る、鬼役は円の真ん中に座り、みんなでガラガラ、ガラガラ…と声を出して言う。鬼の子がドカーン!と言ったときにボールを持っていた子が次の鬼となる。声を出しながら行う遊びは楽しく、子ども達が自然に友だちとの遊びを楽しんでいることが出来る。このような遊びを取り入れて友だちとの仲間意識へと繋がるようにしたい。

(3) 戸外遊びに焦点化した「計画的な保育の位置づけ」について

実際、子ども達をのびのび遊びに誘う際に、具体的にどのように考え、筋道を立てていけば良いかを考える。原田(1997)は「園児の

運動遊びを大別すると、

ア、手や足を使用する。

イ、固定遊具など変形姿勢で巧みに体を動かす。

ウ、音楽やものの動きに合わせて動く。

エ、他の子によって動かされる、鬼ごっこ、ドッジボール、相撲、押しくらまんじゅう、などに分けることが出来る。ア〜ウは自分の体を自分で動かす活動で園児の発達に必要な遊びであるが、十分条件を満たしているとは言えない。」としている。エのように友だち仲間と共に遊ぶ遊びへの導きが必要である。しかし、これまで述べてきたように、子どもの自発的遊であることや、遊び心を育んでいく上に充実したのびのび遊びが展開される。他の子によって体を動かすドッジボール遊びが良いとし、白線で四角いコートを描いて「はい!ドッジボールしましょう。」と遊ばせても真に子ども達の心身の成長を促す遊びとはならない。そこへ至るには計画的に戸外遊びに焦点化した取り組みを保育の中に位置づけ、のびのび遊びへの足場かけをしていくことが必要である。

(4) 非認知能力に視点を置いた「学びの確かめ」について

研究の視点を保育者間で共有し、子どもの内面的な学びに視点を置いて保育し、具体的な子どもの遊びや姿から、非認知能力を育む視点を重視した学びの読み取りを行った。それらの目には見えない学びの読み取りは保育者の感覚に頼るところがあるが、保育は保育者の主観(子どもの見方)をもつことが必要であり、それを周りの保育者と交流することにより確かに出来る。

3 分析

教師間で戸外遊びについて焦点化した保育実

践を考察し、非認知能力につながる内面的な学びは、どのような子どもの姿に表れているかを交流、検討し実践事例の中から共有出来るようにした。交流、検討するにあたり、子ども達の普段の園生活の様子や、子ども一人ひとりの援助の方向性なども含めて話し合うことで解釈の妥当性と信頼性の担保に努めた。

4 倫理的配慮

保護者に対して研究や教育現場で教育研究目的以外に使用しないこと、匿名性の厳守などを文書や口頭で説明し同意を得ている。

5 実践事例

以下、これまで述べてきた研究の視点をもと

に保育者間で保育の計画、保育内容の検討をしつつ、最も重要な保育者間の子どもの学びを読み取る感覚の交流を行い、確かめ合ってきた中からの実践を記す。

(1) 戸外遊びに焦点化したのびのび遊び・保育の中での計画的な位置づけと保育者間共有について

のびのび遊びの計画的な位置づけと具体的な保育内容や援助について保育者共有するために子どもの育ちの節目に考える指導案(4、5歳児合同ののびのび遊び)を取り入れた。年間を通して、4月のはじまりや、ゴールデンウィーク前、2学期はじめ、運動会前後など、子どもの育ちの節目だと考える時期に子どもの遊びの様子、子どもの興味、援助の方向性

表1 ゴールデンウィーク前の遊びについて

「のびのび遊び」支援案 4月4週目～GW前

□□□□□幼稚園

支援者 ○○・○○・○○・○○・○○	
子どもの姿	<p>《4歳児》⁴¹⁾ ○母親と離れるときに泣いていた子ども泣かずに登園し、安定して過ごしている。⁴²⁾ ○気の合う友だちが見つけたり話め、喜んで遊んでいる。⁴³⁾ ○用具の取り合いなどトラブルもあるが、一緒に話し合い、気持ちを伝え合っているところがある。⁴⁴⁾</p> <p>《5歳児》⁴⁵⁾ ○自分たちで遊びを見つけた時、友だちを集めようとしたりする姿が見られる。⁴⁶⁾ ○花びら集めやだんごむし探しなど、自然との触れ合いを楽しんでいる子どももいる。⁴⁷⁾</p>
	<p>《4歳児》⁴⁸⁾ ○気の合う友だちと一緒にしたい遊びを見つけて楽しんで遊ぶようにする。⁴⁹⁾ ○友だちと話をしたり、用具を貸し借りしたりしながら、一緒に遊ぶようにする。⁵⁰⁾ ○友だちと体を動かして遊ぶ楽しさや嬉しさを感じる。⁵¹⁾</p> <p>《5歳児》⁵²⁾ ○友だちと一緒に体を動かして遊ぶことを楽しむ。⁵³⁾ ○自分たちで話し合い、遊びを始めようとする。⁵⁴⁾ ○遊びの中で、思いを出し合ったり、ルールを考えたりしながら遊ぶようにする。⁵⁵⁾</p>
遊びの展開・教師の支援	
<p>《むくくくまさん》⁵⁶⁾ ★歌のかけあいや、逃げたり追いかけてする楽しさに共感する。⁵⁷⁾</p> <p>《ブランコ》⁵⁸⁾ ★友だちと交代したり、押し合ったりして一緒に楽しんでいる姿に共感する。⁵⁹⁾ ★年長児が年少児にブランコの乗り方を教えたり、回っていることに気付き、助けようとする姿を十分認める。⁶⁰⁾ ★様子を見ながら、他の遊びへの興味を広げられるように声をかける。⁶¹⁾</p> <p>《のびのび種》⁶²⁾ ★年少児が年長児の姿を見て、自分もやってみようというチャレンジする姿を応援する。⁶³⁾ ★種足になったり、友だちと協力したりしながら遊ぶ姿を認め、意欲を高めていく。⁶⁴⁾</p> <p>《だるまさんがころんだ》⁶⁵⁾ ★自分たちで始めようとする姿を見守り、始められたときは十分認める。⁶⁶⁾ ★鬼との言葉のかけ合いや、進んだり止まったりする楽しさを感じられるように声をかける。⁶⁷⁾</p>	<p>《砂場遊び》⁶⁸⁾ ★友だちとのかかわりを感じられるように声をかけたり、見守ったりする。⁶⁹⁾ ★用具を貸し借りしている姿を見守る。⁷⁰⁾ ★並行遊びになっているときは、友だちとのかかわりながら遊ぶことができるように声をかけていく。⁷¹⁾</p> <p>《遊びが見つからない子・一人ウロの子》⁷²⁾ ★友だちの遊びを伝えたり、したい遊びを見つけ、教師と一緒に遊び出したりし、友だちと遊ぶことが楽しい、嬉しいという気持ちを大きくしていけるようにする。⁷³⁾ ★興味のある遊びを探りながら、仲間関係を広げていけるように声かけをする。⁷⁴⁾</p> <p>《爆弾ボール》⁷⁵⁾ ★自分たちで集まったり、円を描いたり、遊び始めようとする姿を見守り、始めることができたときは十分認める。⁷⁶⁾ ★ボールに当たらずによけられたときや友だちに当てることができたときに声をかけたり、応援したりして、気持ちを盛り上げていく。⁷⁷⁾</p> <p>《ボケモンごっこ・ヒーローごっこ》⁷⁸⁾ ★子ども同士の間取りや見守りながら、仲間関係をつかんでいく。⁷⁹⁾ ★特定の子の思いだけで遊びがすすんでいかどうかを見守っていく。⁸⁰⁾</p> <p>《一輪車》⁸¹⁾ ★こつこつと頑張っている姿を応援する。⁸²⁾ ★少しでも長く乗れたときは、すぐにかけより、ハイタッチなどをして一緒に喜び、嬉しさに共感する。⁸³⁾</p> <p>《花摘み・虫探し》⁸⁴⁾ ★見つけた時、捕まえた時嬉しさに共感する。⁸⁵⁾ ★花びらをままごと遊びに使っていたり、色水を作ったりして、自分たちの遊びに取り入れている姿を認める。⁸⁶⁾ ★命の大切さをしっかりと伝えていく。⁸⁷⁾</p> <p>《お家ごっこ(ままごと)》⁸⁸⁾ ★自分たちで、お父さん、お母さんなど、役割を決めて遊んでいる姿を見守る。⁸⁹⁾ ★自分の思いを言い合ったり、かわったりして遊んでいる姿を大切にみる。⁹⁰⁾</p>

を全保育者で共有することを大事にした。どのような遊びを足場かけにするかを考えると共に、どのように子どもを見て、どのように援助することが良いのかを、このような指導案を作成する際に全保育者で考慮し、充実したのびのび遊びの展開を目指し、心の内面や非認知能力の学びの視点を保育者間交流することで、心と体を育てる遊びへと誘うことができる考えた。教師間で保育内容や援助について、具体的に交流・共有しながら計画的に保育を行った実践事例。(表 1)

【考察】

入園当初は保育者との信頼関係の構築を第一のねらいとする。これはゴールデンウィーク前の指導案であり、4月末、入園した4歳児も安定して過ごす様子が記され、担任との信頼関係が構築されつつあり、気の合う友だちとの遊びへと誘い掛けの準備をしている。しかし、花摘み・ヒーローごっこ・お家ごっこなど、無条件で子どもたちが好きな遊びは出来るように見守りつつ、むっくりくまさんや、だるまさんがころんだ、など声を出して遊べる比較的誘いやすく、友達と一緒に体を動かして遊び出すきっかけとなりやすい遊びへの誘いかけを遊びの展開予想・支援としている。また遊びははじめにくい子へは個々に援助していることが指導案の中に記されている。こうして、具体的な保育内容や子どもの主体性を待ちながらの援助の在り方・考え方を保育者間で共有していくことで次第に鬼遊びやドッジボールなど、さらにのびのびと体を動かし、子どもが主体的に遊べるようになる考える。

(2) 無自覚な学びとともに楽しく戸外遊びを経験するために

子どもたちの楽しい戸外遊びの経験を豊かにするというねらいを持ち、時にはクラスみんなで楽しく体を動かす遊びに取り組んだ実

践事例。

①『ビリビリボール投げ』

遊びや生活の中で、経験が少ないと思われるボール投げ遊びの機会を意図的に持った。風が強く吹いていた日、ナイロンカラーテープを園庭の端から端に渡すと、風に吹かれるテープからパチパチというような音が聞こえてきた。それを見た子ども達が「ビリビリ電気が通じているみたいだ!」とイメージし、その場の雰囲気面白そうだと感じ、すぐに周りの子ども達が集まってきたところで「テープにボールが当たらないように(電気に当たらないようにとイメージし)投げてみよう!」と教師から誘い掛けた。はじめはすぐ近くで玉入れの球を入れるかのようにボールがテープを越せるように投げていたが「ここからでも飛び越せるかなあ。」と地面に線を入れることで、少し遠くからでも飛び越せるように投げてみよう!と子ども達の意欲が高まった。保育者が、さらに追加して何本かの線を引いたことにより自分のペースでチャレンジすることが出来、20分程の間、遊びは続いた。

【考察】

充実した戸外遊びとするためには、教材としての足場かけが必要だと考え、風の強い日からこそその環境構成である。この日の保育者の環境構成は子ども達の遊び心を誘発していると考えた。そこには、必ず子ども達が楽しいと感じる要素を組み込み、子ども達自身は無自覚な学びとなるように考慮しながら実践した。はじめは保育者が足場をかけたビリビリボール投げが、ビリビリ電気が通じているみたい」と子ども達の中でイメージが広がった時点で、そっと子どもに働きかけた保育者の援助が、保育者主体の投げかけであることから離れて、子ども主体の遊びとなった要因となっている。遊ぶ中で子ども達が地面に線を入れて遊びはじめた。す

でに子ども主体の遊びとなっているので、自分たちで次の目当てをもち「こうしてみようと発案し、それが周りの子ども達へも伝わっていった。

②『チーム対抗ボール投げ』

運動会近くになり、さらにボール投げへ熱中して遊べる環境構成を考え、様々な素材を用いて、一人一つずつ手作りのボールを作った。ボール以外に大・小様々なダンボール箱を環境構成すると、はじめは、そこへボールが入ったとか、入らなかったかなどと個々で楽しんだ。そうして遊ぶうちに、ダンボール箱へ入るか、入らないかの遊びからダンボールを超えてボールを投げる子が出てきた。その様子から「思い切り投げたい」という子どもの気持ちの動きに寄り添い、大きなビニールプールを準備し環境の再構成を行った。この環境構成は、入るかな…という調整より、思い切り遠くへ投げて…という子ども達の遊び心に適していた。

こうしてボール投げ遊びを楽しむ中で保育者は、ここでも“友達と力や気持ちを合わせて活動する喜び”を味わえるように、との願いをもち「チームでボール投げ競争をしよう」と誘いかけ、どのような方法でするかを子どもたちと話し合いながら進めた。その結果、ビニールプールを、手前・真ん中・遠くと、3個連ねて配置し、手前は1点、真ん中は2点、遠くは3点にしてチームから一人ずつ投げて、合計点数を競い合うという遊びへと発展し運動会当日の競技ともなった。

【考察】

このボール遊びにおいて主体的に取り組めた要因となっていることがマイボールを作ったということだと考える。“自分だけのボール”というボールへの気持ちは子ども達の意欲を大きく支えたと考えた。チーム対抗となり、はじめ

はルールが明確に分からない子もいたが、点数の加算については丁寧に支えたり、投げる時にかかる声を決めて遊びを盛り上げたりするうち、次第に同じチームの子が遠くのビニールプールに入れることが出来ると、その子を迎え入れるときに、ハイタッチをしたり、「〇〇ちゃんありがとう！」と言いつたりする姿が見られるようになった。また勝ったことが分かった瞬間には「やったあ～！」と飛び上がって同じチームの仲間と喜び合う姿が見られた。そのような姿から保育者が、この遊びへ焦点化した環境構成が目前の子ども達にふさわしいものであったことや、子ども達の学びへ向けての保育者の願いが概ね達成されたのではないかと考える。さらにはこの遊びの準備や片付けをする際に、みんなで力を合わせて素早くしようとする状況が見られたことから、自分たちで主体的に取り組んだり、自治的に活動したりしようとする時の培いになったと考える。

(3) 戸外遊びの経験の中で非認知能力について 視点を持ち、学びの確かめをするために

主体的な楽しい戸外遊びの中で非認知能力を育む視点を重視して学びの読み取りを行うことで、体を動かして遊ぶ経験とともに子どもの内面の育ちを読み取った実践事例。

『順番が分かるよ！（リレー遊び）』

のびのび遊びの中で、去年の年長児への憧れからリレー遊びがはじまった。はじめは並び方もバトンを受け取る順番もバラバラだった。しかも並んでいるところが、図1のようにリレートラック上の外側だった。

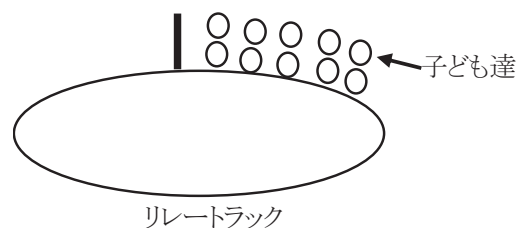


図1 リレートラック上に並ぶ子どもたちを表している

よって、リレートラックを回って帰ってくると、必然的に誰にバトンを渡してよいか分からなくなり、適当に渡している状況となっていた。何回も走る子、なかなか走れない子が出て来て、子ども達の中にもストレスが生じてきた。

「僕、全然バトンもらってない。」

「〇〇ちゃんは、何回も走っている。」

「順番がめちゃくちゃだから…」

「だって、並ぶところが分からない。」

保育者は、この時期なら何とか自分たちで解決出来るであろうと見極め見守る。

「そうだ！平均台を持ってこよう！」

一人の子の提案に、みんなが動き、図2のように平均台をリレートラックの中に入れて設置。走って帰ってきた子は、リレートラックの中の平均台に座ることとした。

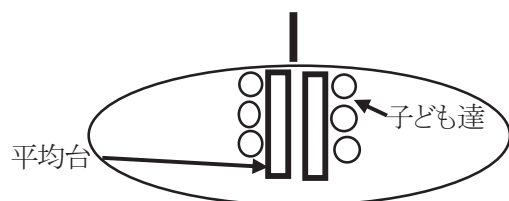


図2 走り終えて平均台に座っていく子どもたちを表している

【考察】

リレー遊びでは、どうすれば遊びが上手く再開出来るかを自分たちで考え、話し合い、友だち同士で伝え合い、友だちの意見を受けとめて共有し、実現することが出来た。リレーをして遊びたいという子ども達みんなの主体的な気持ちが、1人の子の発案と皆の受け止めに繋がったと考える。停滞したリレー遊びを自分たちで再実現した一連の活動の中には、遊びの再開へ向けてそれを自分たちのこととし自治的に活動しようとする中、主体性や、仲間と協力しようとする力、やりたいことに対して粘り強く取り組もうとするというような非認知能力に視点を置いた学びが見て取れる。こうして、のびのび

身体を使って遊びながら、内面的な育ちである非認知能力が育まれる視点を重視した学びの確かめをすることが大事なポイントとなる。

4 おわりに

環境による教育を基本とする幼児教育の中で戸外遊びに焦点を当てて、それらの保育の中での位置づけや環境構成、援助の方向性などについて詳述してきた。この度、現代の子どもたちの心身の状況や遊びの課題を再考し、のびのびと体を動かして遊べるようにと保育の足場をかけたのであるから、例えば幼児体力測定などで、育ちを立証していくというような側面も可能であったかもしれない。しかし、この研究では幼児の内面的な育ちである非認知能力に視点を置くことを重要視し、実践からの学びの確かめを行えたことは成果である。幼児期の内面的な育ちを表すことは極めて難しいが、ここに着目し、子ども同士のかかわりや、つぶやき、遊びの様子などから実践事例のように読み取ったことで、結果的に遊びそのものも充実したものとなったと考える。課題として、実践事例から読み取ったことは、非認知能力に視点を置いた手に取って見ることの出来ない幼児の内面であり、教師の主観に頼るものである。幼児教育のいかなる場面においても、この内面の読み取りがかかわってくるが、偏った見方になってはいけない。しかし、ここを保育者間で共有・継承していくことが大変難しく課題となっている。保育者間で内面の読み取りの感覚交流をし続けることが必要である。

子どもにとっての成長は、遊び込むこと、友達と一緒に夢中になって遊んだこと、その体験そのものが学びに向かう力となる。夢中になって遊ぶ経験を確認にしたいがために、いつも保育者は考え、探り続けているのだと思う。子ども達の心身が躍るように弾んでいるかどうかを今後の保育のなかでも見極めていきたい。さら

には、幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎と幼稚園教育要領で謳われているように、この小さい心と体の中に培われた力が、その後の豊かな道のりを支え続けるものでありたい。その一端となり得るのではないかと考えられる非認知能力の学びに繋がる内面的な育ちを感じ取れた場面に出会った。のびのび遊びを実践していたある日の出来事である。10人以上の子ども達が集まりサッカー遊びをしていた時、力強く蹴った子のボールがA児のお腹にあたり、A児は泣いてしまった。怪我には至っていないようなので保育者は子ども達を見守ることにした。サッカー遊びの仲間達は泣いているA児のそばへ寄ってくる。「強く蹴りすぎたかなあ」「だめやで」「でも、わざとしたわけじゃないし」「大丈夫？」そんな会話がされながら、泣いているA児を囲むように4人の子がサッカーの遊びを離れて、近くの滑り台へ退いた。サッカー遊びは停滞。その時、4人の中の1人、B児が他の3人に「サッカー行っておいで、私がAちゃん見とくわ」と3人にサッカー遊びへ戻るように言ったのだった。B児はA児のそばに居だけで特に声はかけない。しかし、保育者が少し離れたところから見守っていても、時間が流れるにつれて少しずつA児が立ち直っていく様子がうかがえた。そこへ、先程サッカー遊びへと戻った3人の子がA児のところへ戻ってきて「Aちゃん大丈夫？」と声をかけたことがきっかけとなり、A児はゆっくりと歩き出し、皆でサッカー遊びへ復帰することが出来た。保育者が子ども達で解決できるであろうと見極め見守る中、見事に自分たちで解決した一コマだった。

子どもたちにとって、これからの未来を切り拓くために必要な非認知能力の学びを見極めながら環境構成を考え続けていきたい。

【引用・参考文献】

- 1) 河邊貴子 (2020) 『「遊びを中心とした保育」～保育記録から読み解く“援助”と“展開”』、萌分書林、p.15
- 2) 文部科学省 (2017) 幼稚園教育要領 チャイルド社
- 3) 文部科学省 (2012) 幼児期運動指針ガイドブック～毎日楽しく体を動かすために～
- 4) 中村和彦 (2011) 『運動神経がよくなる本』、マキノ出版、P.172
- 5) 春日晃章 (2022) 全国国公立幼稚園長会『幼稚園じほう「わくわく運動遊び」』、p.6
- 6) 田中聡 (2021) 「幼児の『運動遊びの世界』を広げる保育に関する事例的研究」、神戸親和女子大学教職課程・実習支援センター研究年報 p.87-101
- 7) 佐々木晃 (2018) 『0～5歳児の非認知能力』、チャイルド本社、P.120
- 8) 原田碩三 (2001) 『園児の心を満たす・快の保育と身体表現』、中央法規、p.148
- 9) 原田碩三 (1997) 『幼児健康学』、黎明書房、p.141
- 10) 阿部扶早 (2020) 『頌栄幼稚園の教育～ひかりの子～』、尼崎印刷株式会社 p.47
- 11) 全国国公立幼稚園長会 (2005) 『幼稚園じほう「幼児期の発達と教育」』
- 12) 全国国公立幼稚園長会 (2023/4) 『幼稚園じほう「幼児教育の重要性を社会と共有する」』
- 13) 兵庫県三木市立自由が丘幼稚園 (1993) 兵庫県三木市教育委員会指定研究発表会『～こころとからだを育み群れ遊び～研究冊子
- 14) 神山潤、中村和彦 (2011) 「四快のすすめ」、新曜社、p.227

(令和6(2024)年2月2日受理)

Abstract

A study of childcare focusing on non-cognitive abilities and outdoor play ~ Focusing on outdoor play in early childhood education based on environment- based education ~

Kansai Fukushi University Mariko Maruyama

Summary: In this study, when considering an environment suitable for young children in the environment-based education that is the central method of early childhood education, we will focus on outdoor play as part of this and consider it in the context of childcare. I decided to do so. The environment surrounding young children in recent years has changed dramatically from what it was a dozen years ago, and the experience of “physically playing ” has decreased significantly. Therefore, we thought about the importance of experiencing outdoor play by moving the body during early childhood, and how children can enjoy outdoor play and accumulate it as an activity where they can unconsciously learn through independent activities. Furthermore, during early childhood, children acquire various skills through concrete experiences while their mind and body are closely involved. Therefore, while playing freely outdoors, we emphasize the importance of encouraging children to play independently and engage in autonomous activities with their friends, in addition to helping children develop their motor skills. We focused on the perspective of fostering non-cognitive abilities such as motivation, cooperativeness, communication skills, and self-affirmation during learning. Keyword: Environment, outdoor play, unconscious learning, non-cognitive ability

Key words : environment, outdoor play, unconscious leaning, non-cognitive abilities